



一貫コース通信

かつての、そしてこれからの「日本のモラル」

最近嫌な事件が続いている。特に顕著なのがここしばらく盛んに報道されているネットを介した広域強盗だが、ここにきて類似の事件が県内で立て続けに起こっている。残念ながらその中のいくつかが私にとって地元での出来事で、付近では不安が広がっているようだ。

話は変わるが、私は学生時代、日本統治時代の台湾を研究対象にしていた。当時の台湾では戦前を知る人々が数多くご健在で、彼や彼女が直接経験した戦前の台湾の話を知ることができた。私はそうしたインタビューの蓄積と文字資料とを突き合わせ、日本の台湾統治が一般庶民にとってどのようなものだったのかを知ろうとしていた。そのような作業の中で、私は戦前の日本そのものを知ったのだと思っている。なぜなら私のフィールド（研究対象となる場所）が、日本から台湾に移民として渡った人たちの作った村、日本人移民村だったからだ。そこに住んでいるのはもちろん日本人だが、農場の労働力として雇われた台湾人の中にはそこで日本人と同居する者もあり、村外の集落から働きに来る者もあり、あるいは日本人相手に商売をする者もいた。そうした活発な交流の結果、日本人は内地に引き揚げる際に、彼らの開拓した土地を親交の深い台湾人に託した。私が話を聞いたのは、そのようにして戦前に日本人と交流し、今もそこに住んでいる台湾人たちだ。彼らに日本人はどう見えたのか。

誰もが口を揃えたのが「治安の良さ」だった。誰も家に鍵などかけなかった、という。この「治安の良さ」は、私の研究範囲のみならず、日本統治時代の台湾で広く語られることだ。礼儀正しく、公共心が高く、決まりを守る。それが当時の台湾人の目に映った日本人だった。もちろんそれが全てではないだろうし、日本人である私に聞かせたくないことは言わなかったのかもしれない。だが、一面の事実ではあったろう。だからといって現代の日本人のモラルが低下した、民度が下がった、という気はない。時代そのものが変わったのだ。

国際化の時代、日本人の仲間内だけで生きるということはもはやできないし、プライバシーが重視されるようになった結果、ご近所付き合いなどの地域の互助的な関係性もどんどん希薄化している。各自の権利ばかりが主張される状況下で、いまや「譲ったらつけ込まれる」という恐怖心が強く、「お互い様」の精神を発揮する余裕もない。「世間」の視線を恐ろしいものと捉え、襟を正して生きていたその緊張感も忘れられ、どこで誰に見られようが気にも留めない。SNSでのやり取りに代表されるように、自分たち以外の存在は視界に入らないのだ。今の日本で高いモラル意識を持って生きると、あるいは損をするのかもしれない。

だが、それでも私は生徒たちに公共意識を持って欲しいと思う。見られる自分を意識し、自分の考える正しい行動を選び、そうした各々の行動が総体としての社会全体を形作っていく。生徒たちにはそんなあり方の担い手になって欲しい。それはかつての日本とも違う、彼ら自身の社会であり、彼ら自身のモラルであるはずなのだ。

